ベートーヴェン
交響曲第７番
Symphony No.7 in A-major Op.92

バーンスタイン
交響曲第１番「エレミア」
Symphony No.1 "Jeremiah"

バーンスタイン
交響組曲「波止場」
Symphonic Suite from 'On the Waterfront'

指揮：齊藤 栄一

メゾソプラノ：小川 明子

水星交響楽団

第52回 定期演奏会

2015年9月27日（日）

12:50 開場　13:30 開演

横浜みなとみらいホール 大ホール

ご挨拶

本日はお忙しい中、私ども水星交響楽団（略称：水響）の演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

さて、本日は、前半にレナード・バーンスタインの作品を２曲、後半にベートーヴェンの交響曲第７番を演奏致します。バーンスタインについてはいまさら説明する必要もないと思いますが、20 世紀アメリカ最大の指揮者・作曲家で、今年 2015 年は没後 25 年にあたります。彼が最も敬意を表していた作曲家がベートーヴェンであり、最後の来日公演（1990 年）にロンドン交響楽団と、また、生前最後に指揮（ボストン交響楽団）した曲がまさにこの交響曲第７番でした。かねてより、バーンスタインを激しく尊敬してきたメンバーが多い水響としては（私もそのひとりで、最後の来日公演のベートーヴェンを聴き、溢れる涙をおさえられなかったことをよく覚えております）、没後 25 周年に際し、改めてその人間愛に満ちた音楽に想いを馳せざるをえません。

©Takashi Fujimoto

バーンスタイン交響曲第１番「エレミア」の独唱には、昨年５月のマーラー「復活」に続き、小川明子さんをお招き致しました。小川さんとは、過去「大地の歌」「第３番」「復活」とマーラーの交響曲３曲で共演させていただきました。バーンスタインといえば、まずマーラーの凄絶な名演の数々が思い出されますが、彼のマーラーは、同じユダヤ人という出自に留まらない深い共感度に満ちており、この作品にも、有形無形の影響が色濃く現れているように思います。過去３回の名唱にまして、本日も素晴らしい独唱をお聴かせいただけるものと確信しております。

それではごゆっくりとお楽しみください。

水星交響楽団　運営委員長　植松隆治

水星交響楽団

水星交響楽団は、1984 年に一橋大学管弦楽団の出身者を中心に結成されたアマチュア・オーケストラである。都内の主要ホール等で、定期演奏会を年２回行い、マーラー、バルトーク、ストラヴィンスキー、プロコフィエフ、ホルストなど大編成の曲に積極的に取り組んでいる。楽団の名前の由来は、一橋大学のシンボルである「マーキュリー」やセロ弾きのゴーシュの「金星音楽団」から来ている等いろいろ考えられる。

本日のプログラム

L. バーンスタイン

交響組曲「波止場」（約 25 分）
交響曲第 1 番「エレミア」（約 30 分）

― 休憩 ―

L.V. ベートーヴェン

交響曲第 7 番　イ長調作品 92（約 45 分）

指揮
齊藤（さいとう） 栄一（えいいち）

©Takashi Fujimoto

京都大学にて音楽学を、国際基督教大学大学院にて美術史学を研究。この間、指揮法を尾高忠明、田中一嘉、円光寺雅彦の各氏に師事。1981 年には京都大学交響楽団と 2 週間に渡り、ドイツ、オーストリアにて演奏旅行を行い、ザルツブルグ音楽祭などにて指揮。82 年には関西二期会室内オペラ・シリーズ第 9 回公演、ブリテン作曲「ねじの回転」（関西初演）の副指揮者を務める。

84 年に水星交響楽団の常任指揮者に就任。水星交響楽団、オルフ祝祭合唱団との共催で、佐多達枝振り付けのバレエ「カルミナ・ブラーナ」（95 年、東京文化会館）、「ダフニスとクロエ」（99 年、新宿文化センター）を指揮した。その後、「カルミナ・ブラーナ」のバレエ公演では、神奈川フィル、東京シティ・フィルも指揮している。2005 年には、同曲を含むオルフの「トリオンフィ」3 部作（4 台のピアノと打楽器）を指揮している。

明治学院大学文学部芸術学科教授。著書に「往還する視線　14 ― 17 世紀ヨーロッパ絵画における視線の現象学」（近代文芸社）、「振っても書いてもしょせん酔狂」（水響興満新報社）がある。

メゾ・ソプラノ
小川（おがわ） 明子（あきこ）

東京芸術大学卒業、同大学院修了。文化庁オペラ研修所第 10 期修了。1992 年第 61 回日本音楽コンクール第 2 位。第 4 回日本声楽コンクール第 3 位。1993 年第 4 回奏楽堂日本歌曲コンクール第 1 位ならびに山田耕筰賞。1997 年文化庁派遣芸術家在外研修員として 1 年間ウィーンに留学。

オペラではワーグナー『さまよえるオランダ人』、演奏会形式オペラのシェーンベルク『モーゼとアロン』、R. シュトラウス『サロメ』、ブリテン『ピーター・グライムズ』など多数出演。コンサートではヘンデル『メサイア』、バッハ『マタイ受難曲』、『ロ短調ミサ』等の宗教曲やベートーヴェン『第 9 』、マーラーの交響曲などで多くのオーケストラや合唱団と共演している。CD「日本歌曲選」、「啄木とみすゞを歌う」、「からたちの花　山田耕筰歌曲集」、「荒城の月　国楽を離陸させた偉人たち」、「さくら横ちょう　中田喜直 4 つの歌曲集」（ピアノ／山田啓明）をリリース。二期会会員。
http://www.geocities.co.jp/MusicHall/9932/

L. バーンスタイン　Leonard Bernstein

天才的音楽家バーンスタイン
～栄光と苦悩の生涯～

今年は、20 世紀を代表するアメリカ人指揮者・作曲家・ピアニストのレナード・バーンスタイン（1918.8.25 ～ 1990.10.14）の没後 25 周年に当たる。「バーンスタイン死去」という突然のニュースの驚きは今でも生々しく世界中の音楽ファンの記憶に残っている。音楽界は最も輝かしい星を失ってしまった。残念ながらその日から今日に至るまでバーンスタインに匹敵するような人物は現れていないし、恐らく今後も現れることはないだろう。だが、天才的音楽家バーンスタインの生涯は、指揮者と作曲家とのはざまでもがき苦悩した生涯でもあったのだ。

衝撃的だったデビュー　（1918 年：0 歳～ 1944 年：26 歳）

バーンスタインは、ウクライナ系ユダヤ人移民の２世として、マサチューセッツ州ローレンスという町に生まれた。彼は実業家である父親の反対を押し切って音楽の道を志し、ハーバード大学・カーティス音楽院で学ぶ。1941 年カーティス音楽院を卒業した後はしばらく仕事が得られず、活路を作曲に求めた。この時期に生まれた作品がデビュー作「エレミア交響曲」（1942 年）である。

1943 年夏ニューヨーク・フィルハーモニックの「副指揮者」に就任。同年 11 月大指揮者ブルーノ・ワルターの代役としてニューヨーク・フィルを指揮した。この日のコンサートは一大センセーションを巻き起こし、彼はたちまちアメリカ音楽界のスターとなった。

1944 年ブロードウェイのミュージカル「オン・ザ・タウン」の作曲を担当したが、このミュージカルは大ヒット作となった。彼は一躍ブロードウェイの寵児となり、作曲家としての名声も得ることになった。

創作の充実期　（1945 年：27 歳～ 1957 年：39 歳）

バーンスタインはニューヨーク・フィルデビュー後、スター指揮者として多忙な日々を送っていた。しかし彼は「客演指揮者としてあちこち飛び回るより、作曲家として名を成すことの方が重要なのではないか」と考え、自分の力を作曲に振り向け、数々の傑作作品を生み出していく。この時期の交響作品としては、交響曲第２番「不安の時代」（1947 年～ 1949 年）と「セレナーデ」（1954 年）がある。また舞台作品としては、オペラ「タヒチ島の騒動」（1951 年）、ミュージカル「ワンダフル・タウン」（1953 年）、同「キャンディード」（1956 年）、そして 1957 年にはミュージカルの金字塔である「ウエスト・サイド・ストーリー」が生み出される。この他にも、ジャズ曲「プレリュード・フーガとリフ」（1949 年）、映画音楽「波止場」（1954 年）が生まれており、彼にとっては最も創作力が充実していた時期であった。

ニューヨーク・フィルハーモニック常任時代
（1958 年：40 歳～ 1969 年：51 歳）

1958 年、バーンスタインはアメリカ生まれの指揮者として史上初めてニューヨーク・フィルハーモニック交響楽団の音楽監督に就任する。彼とニューヨーク・フィルのコンビは大成功を収め、同フィルの黄金時代をもたらした。彼は生活のすべてをニューヨーク・フィルとの活動に捧げることになり、作曲のペースはかなり落ちてしまう。この時期の作品としては、交響曲第３番「カディッシュ」（1963 年）、「チチェスター詩篇」（1965 年）の２曲があるだけである。彼は指揮者と作曲家のどちらにも徹しきれない自分を嘆き、「後世に残るような曲を書きたい」という強い思いから、11 年続いた音楽監督の地位を辞任する。

ヨーロッパ指揮界の救世主（1970 年：52 歳～ 1979 年：61 歳）

音楽監督を辞任した後、作曲に最大限集中し完成した作品が「ミサ曲」（1971 年）だった。しかしながら、せっかく作曲のための時間を得たにもかかわらず、ヨーロッパの著名なオーケストラや歌劇場から客演の要請が殺到し、「ヨーロッパ指揮界の救世主」として殺人的なスケジュールをこなしていく。特にウィーン・フィルとは強固な関係を築き上げ、その蜜月時代は生涯続く。こうした飛ぶ鳥を落とす勢いとは裏腹に、1976 年以降、妻フェリシア・モンテアレグレとの不和と死は彼の人生に暗い影を落とすこととなる。

「ミサ曲」以降のこの時期の作品としては、バレエ「ディバック」（1974 年）、政治的序曲「スラヴァ！」（1977 年）、声楽曲「ソングフェスト」（1977 年）がある。

最後の 10 年間　（1980 年：62 歳～ 1990 年：72 歳）

1980 年以降バーンスタインは、主にウィーン・フィル、ニューヨーク・フィルを指揮して、ベートーヴェン、ブラームス、マーラーなどの主要作品を精力的に録音し、カラヤンと並ぶ 20 世紀を代表する指揮者としての地位を揺るぎないものとしていく。反面彼は「まだ永遠に残るような名曲を書いていない」という強迫観念のような思いに悩まされていた。この時期の作品として、「オーケストラのためのディヴェルティメント」（1980 年）、「ハリル」（1981 年）、そしてオペラ「クワイエット・プレイス」（1983 年）を完成させた。このオペラはバーンスタイン渾身の力作であったにもかかわらず、結果は大不評だった。以後創作意欲を著しく減退させたのか、大きな作品は書かれず、「管弦楽のための協奏曲ジュビリー・ゲームス」（1986 年～ 1989 年）が最後の作品となった。

バーンスタインは鬱屈した怒りや悩みをタバコとアルコールで晴らすようになり、彼の身体は病巣に蝕まれていく。

1990 年夏～ファイナルコンサート

1990 年６月バーンスタインは第一回パシフィック・ミュージック・フェスティバルに参加するため日本を訪れた。札幌でのレッスンを終えた後、ロンドン交響楽団と東京での公演に臨んだ。しかし東京に到着した時には体調を崩し、二回の東京公演以降に予定されていた演奏会をキャンセル、途中でアメリカに帰国することになる。８月 19 日、彼はタングルウッド音楽祭を訪れ、ボストン交響楽団との「クーセヴィツキー記念コンサート」に臨む。曲目は東京公演と同じブリテン作曲「ピーター・グライムズより四つの海の間奏曲」とベートーヴェン作曲「交響曲第７番」であった。足元がふらつきながらも「四つの海の間奏曲」と「交響曲第７番」の第１・第２楽章を振り終えたが、第３楽章に入ると激しい咳の発作に襲われ、手を動かすことができず、指揮台の手すりにもたれて合図を送るだけの状態になった。それでも音楽は止まることはなく、第４楽章に入ると何とか立ち直り、人々に凄まじい感動を与えてコンサートは無事終了した。だが、このコンサートは彼の「ファイナルコンサート」となってしまった。10 月９日「仕事のエネルギーを作曲と教育に向けるため」指揮活動からの引退を発表。そのわずか５日後の 10 月 14 日、バーンスタインは進行性の肺気腫による突然の心臓麻痺で帰らぬ人となった。享年 72 歳。

バーンスタインの作品の特徴と評価

バーンスタインは、代表作「ウエスト・サイド・ストーリー」1作をもって「20世紀を代表する作曲家の一人である」と言っても決して過言ではない。しかし、彼の作曲家としての実績が「ウエスト・サイド・ストーリー」のみに代表され、他の作品があまり知られていないということは、きわめて残念なことだ。

バーンスタインの作品は、交響曲、管弦楽曲、オペラ、ミュージカル、バレエ音楽、歌曲、ピアノ曲など幅広いジャンルにわたって70曲以上もある。彼の音楽の特徴としては、次のふたつのことが重要だ。ひとつはクラシック、ジャズ、ブルース、ラテン音楽、黒人霊歌、ユダヤの民族音楽、ポピュラー音楽など様々な音楽の要素を取り入れ、不協和音を取り込んだ鮮烈なハーモニー、ポピュラー系のリズム書法、ポリフォニーや対位法など高度な作曲技法で結びつけたこと。そして、彼は20世紀屈指のメロディーメーカーであり、誰にでも口ずさめるような、やさしく、しかも美しいメロディーが多く用いられており、きわめて親しみやすいということだ。

こうした彼の音楽の特徴は、ユダヤ系アメリカ人として生まれ、アメリカが持つ多彩な音楽環境のなかで育ったことの影響だろうが、それ以上に、出会う人や物すべてを愛さずにはいられなかった彼自身の性格によるところが大きい。彼は「そもそも音楽には高尚も低俗もない」という立場を貫き、音楽に優劣をつけることなく、どの音楽にも惚れ込み、自分のものとせずにはいられなかったのだ。そのためクラシック、ポピュラーいずれの物差しでも測れない作品が多く生まれることとなるのだが、作曲当時は前衛音楽が圧倒的に優位で、調性音楽は無視されていた時代であり、音楽評論家からは「折衷主義」「低俗な音楽」というレッテルを貼られ、作品が不当に低く評価されてきたということはきわめて不幸なことであった。

しかしながら没後四半世紀が経過した今日、彼の多くの作品が世界中で演奏されていることを考えると、「後世に残るような曲を書きたい」という彼の願いは叶ったのではないか、と思う。必ずや近い将来20世紀を代表する作曲家としての地位が確立され、彼の残した作品は多くの人々に永遠に聴き継がれていくに違いない。

バーンスタインを知る上でこれだけは聴いておきたい、本日の演奏曲以外の傑作７曲

交響作品

1. 交響曲第２番「不安の時代」
（1947年～1949年/1965年改訂）

英国詩人W.H.オーデンが書いた同名の詩に霊感を得て作曲された、ピアノ独奏を伴う破格の交響曲。バーンスタインの交響作品の中では最も演奏頻度が高く、日本のオーケストラでもしばしば取り上げられている。特にジャズ風スケルツォである第５楽章「仮面舞踏会」では、バーンスタインの都会的で洗練された最良の音楽を聴くことができる。

2. 交響曲第３番「カディッシュ」
（1963年/1977年改訂）

語り手、ソプラノ独唱、混声合唱、児童合唱が入る大規模な交響曲で、J.F.ケネディの愛する想い出に捧げられたレクイエムとなっている。幅広い音楽技法が取り入れられた感動的な大作であり、「バーンスタインの最もシリアスで最も優れた作品」と評されている。演奏頻度は高くないが、日本では1985年被爆40周年を悼む「広島平和コンサート」にてバーンスタインの指揮により演奏された。

3. セレナーデ（1954年）

独奏ヴァイオリン、ハープ、打楽器、弦楽合奏のために書かれた一種のヴァイオリン協奏曲で、パールマン、クレーメル、ムター、五嶋みどりなど世界的なヴァイオリニストのレパートリーとなっている。バーンスタイン自身が「こんな名曲を自分で作ったなんて知らなかったよ」というジョークを飛ばすほど完成度の高い傑作。

4. チチェスター詩篇（1965年）

交響曲「カディッシュ」の姉妹作品ともいうべき、ボーイソプラノ独唱、混声合唱、管弦楽のための作品。演奏時間20分程度の曲であるが、バーンスタインの最も感動的で美しい作品の一つで、20世紀の最も優れた合唱曲に列せられている。メロディアスな祈りの音楽であり、その新鮮な響きは「静かなジャズ」とも評されている。

舞台作品

5. ミュージカル「キャンディード」
（1956年/1989年最終改訂）

フランスの哲学者ヴォルテールの風刺小説を原作としたミュージカルで、オペレッタあるいはオペラともいえる作品である。内容が荒唐無稽であったため、ミュージカル興業は失敗し長い間放置されていたが、バーンスタインが死の前年全面的に改訂したことで音楽的全貌が明らかになると、一気に評価が高まった。序曲は「題名のない音楽会」のオープニングテーマ曲に使用されており、日本でもきわめて認知度が高い有名曲になっている。

6. ミュージカル「ウエスト・サイド・ストーリー」（1957年）

言わずと知れたミュージカルの最高傑作であり金字塔である。しかしこの作品の音楽的全貌が明らかになったのは、1984年バーンスタイン自作自演の完全版CDが出てからであり、それまでは映画のサントラ盤か「シンフォニック・ダンス」でしか聴くことができなかった。この自作自演CDにより、この作品がオペラとしてもきわめて優れた作品であることが証明され、以降ミラノ・スカラ座をはじめ、トップクラスの歌劇場で上演されるようになった。

7. ミサ曲（1971年）

二つのオーケストラ、混声合唱、児童合唱、歌手、ダンサー、ロックバンドなど総勢200名以上を必要とする巨大な作品。曲はクラシック、ジャズ、フォーク、ロックなど様々なスタイルが取り混ぜてられており、それまでの作品の総決算ともいうべき大作だ。初演後賛否両論の大論争が巻き起こり、バーンスタインは周囲に「巨大すぎて、誰にも理解できない」と嘆いたほどの問題作でもある。初演後40年以上経過した今、自作自演を含め４種類のCDが存在し、頻度は低いものの継続的に上演されていることを考えると、ようやく評価が確立されてきたのではないかと思う。

この「ミサ曲」の後も多くの作品が書かれているが、一般的に演奏されるのは「オーケストラのためのディヴェルティメント」（1980年）くらいで、残念ながら他の作品に接する機会はきわめて少ない。これは彼の書法が次第にヨーロッパ的なものに変わっていき、内面的で地味な作品が多くなったことによるものだ。これらの作品の評価が定まるまでには、もう少し時間がかかるのだろう。

交響組曲「波止場」

バーンスタインが1954年に名匠エリア・カザン監督、マーロン・ブランド主演のコロンビア映画につけた音楽で、彼の書いた唯一の映画音楽である。この交響組曲は、「映画の録音スタジオの屑籠に捨てられるべき運命にあった音楽を救いたい」というバーンスタインの願いから生まれたものだという。全曲は切れ目なく演奏され、音楽そのものがひじょうに雄弁なので、聴き手は映画の内容や筋書きを知る必要がない。この力強い作品は、ニューヨークにおける人生と愛を描いた音楽だとされている。

映画「波止場」

悪徳ボスに牛耳られたニューヨークの波止場を舞台に、正義を貫くために奮闘する男の姿を描く作品。

ニューヨークの港湾労働者たちを顎で使い巨利を得ていた組織にメスを入れた、新聞記者のルポタージュに基づくドキュメンタリータッチの感動的な映画である。

あらすじ

ニューヨークの波止場で働く ボクサーくずれのテリー（マーロン・ブランド）は、兄チャーリーが波止場を仕切るボスのジョニーの命令で仲間を殺す現場を目撃。その妹イディの嘆き悲しむ姿に心動かされ、バリー神父に真相を告白するが、やがてチャーリーも殺害されるに及び、ついに法廷に立つ決意をする。

法廷で証言した翌朝波止場にあらわれたテリーは、仕事仲間から卑怯者としてボイコットされてしまう。しかし、その後意外な結末が訪れる。

曲は、朝靄が立ち込め凍てついたニューヨーク港の情景と人々の孤独感を想い起す、幅広く旋律的な主題に始まる。この主題は4回（3回はホルン、1回はアルトサックス）あらわれるが、場面転換の重要な役割を担っており、主題を挟んで曲は4つの場面に分けられる。

第1部　Andante ～ Presto barbaro

バルバロとは凶暴の意味で、主にチャーリーが仲間を殺す緊迫したオープニングシーンと教会が襲撃されるシーンの音楽で構成されている。打楽器が大活躍し、バーンスタインが得意とする強烈な叩き付けるリズムと不協和音のハーモニーが魅力である。

第2部　More flowing ～ Largamente

テリーとイディ二人のシーンで流れる「愛の主題」で構成されている。この「愛の主題」はフルートにより提示された後、弦楽合奏、全奏へと広がっていき、感動的に盛り上がる。

第3部　Andante come prima ～ Allegro non troppo molt marcato

テリーとボス、ジョニーとの決闘シーンの音楽。スケルツォに相当する。

第4部　Poco piu sostenuto ～ a tempo

エンディングシーンの音楽。ニ長調で勝利のうちに曲が終わると思いきや、突然半音低い変ニ長調に転調し、またいつかどこかで同じことが繰り返されるのでは？という一抹の不安感を残して曲は閉じられる。

初演　1955年8月11日バーンスタイン指揮
ボストン交響楽団　（タングルウッド音楽祭にて）

交響曲第1番「エレミア」

交響曲第1番「エレミア」は、バーンスタインが1941年カーティス音楽院を卒業した後集中的に書かれ翌年完成した、初めてのオーケストラ作品である。彼は1939年頃から旧約聖書の「エレミア哀歌」によるソプラノとオーケストラのための音楽のスケッチを行っていたが、このスケッチを終楽章に置き、ソプラノをメゾ・ソプラノに代えて3楽章の交響曲として完成させた。24歳という若さで書き上げられた、デビュー作であり後世に残る大作である。

この作品が書かれた1939年は第二次世界大戦が勃発した年であり、作曲時期は大戦に重なる。この作品はナチス・ドイツによるユダヤ人虐殺に対する、ユダヤ人バーンスタインの強烈な抗議と深い哀悼が作曲の動機となったといわれる。曲は、預言者エレミアのエルサレム陥落への嘆きと祈りを題材としているが、バーンスタインの真意は、人間を苛酷な運命に置く神への抗議、戦争に対する怒りと悲しみの表出、そして平和への祈りであった。この思いは後の作品、交響曲「カディッシュ」「チチェスター詩篇」「ミサ曲」へと受け継がれていく。

曲は、第1楽章「預言」第2楽章「冒瀆」第3楽章「哀歌」の3つの楽章から構成され、切れ目なく演奏される。

第1楽章「預言」　Largamente

ユダヤ王国がバビロニア王国により滅ぼされるという、エレミアの預言を象徴的に描いた音楽。拍子はたびたび変わるが、主に4分の5拍子で書かれている。ユダヤ教儀式音楽を素材として発展した旋律が多用され、はりつめた緊張感と悲劇性が特徴的な楽章である。バーンスタインの作品の中では最もシンフォニックな音楽で、マーラーやショスタコーヴィチの影響を感じさせる。

第2楽章「冒瀆」　Vivace con brio

預言者エレミアの言葉に耳を貸さず、それをあざ笑う異教徒たちの祭礼の音楽で、スケルツォに相当する。全体的に変拍子で書かれており、目まぐるしく変わる拍子は独特の緊張感、高揚感さらには宗教的法悦を聴き手にもたらす。ジャズやポピュラー音楽の語法を巧みに取り入れた、全曲中最も盛り上がる楽章であるが、中間部ではバーンスタインの歌心溢れる流麗なメロディーが現れる。

第3楽章「哀歌」　Lento

全曲の中心をなす、敬虔な祈りが込められた音楽。ホルンの前奏のあと、「エレミア哀歌」からのヘブライ語による引用がメゾ・ソプラノによって歌われる。最後のクライマックス「なぜ、あなたはわれわれをながく忘れ、～主よ、あなたに帰らせてください」の一節は、バーンスタインがこの曲で訴えたかった核心である。曲は次第に力を失っていくが、絶望の淵に沈んで行くのではなく、ほのかに救いを暗示しつつ終わる。

初演　1944年1月28日バーンスタイン指揮
ピッツバーグ交響楽団
メゾ・ソプラノ独唱ジェニー・トゥーレル

（木村 納）

バーンスタイン　交響曲第１番「エレミア」　歌詞対訳

איכה	*Ēcha*	哀歌
	PEREQ 1.1-3	
איכה | ישבה בדד העיר	*Ēcha yashva vadad ha-ir*	ああ、むかしは、民の満ちみちていたこの都、
רבתי עם	*Rabati am*	国々の民のうちで大いなる者であったこの町、
היתה כאלמנה	*Hay'ta k'almana;*	今は寂しいさまで座し、やもめのようになった。
רבתי בגוים	*Rabati vagoyim*	もろもろの町のうちで女王であった者、
שרתי במדינות	*Sarati bam'dinot*	今は奴隷となった。
היתה למס:	*Hay'ta lamas.*	
בכו תבכה בלילה	*Bacho tivkeh balaila,*	これは夜もすがらいたく泣き悲しみ、
ודמעתה על לחיה	*V'dim'ata al lecheya;*	そのほおには涙が流れている。
אין לה מנחם	*Ēn la m'nachēm*	そのすべての愛する者のうちには、
מכל אהביה	*Mikol ohaveha;*	これを慰める者はひとりもなく、
כל רעיה בגדו בה	*Kol rēeha bag'du va,*	そのすべての友はこれにそむいて、
היו לה לאיבים:	*Hayu la l'oy'vim*	その敵となった。
גלתה יהודה מעני	*Galta Y'huda mēoni,*	ユダは悩みのゆえに、
ומרב עבדה	*Umērov avoda;*	また激しい苦役のゆえにのがれて行って、
היא ישבה בגוים	*Hi yashva vagoyim,*	もろもろの国民のうちに住んでいるが、
לא מצאה מנוח	*Lo matsa mano-ach;*	安息を得ず、
כל רדפיה השיגוה	*Kol rod'feha hisiguha*	これを追う者がみな追いついてみると、
בין המצרים:	*Ben hamitsarim*	悩みのうちにあった。
	PEREQ 1.8	
חטא חטאה ירושל	*Chēt chata Y'rushalyim*	エルサレムは、はなはだしく罪を犯したので、…
(איכה | ישבה בדד העיר	*(Ēcha yashva vadad ha-ir*	（今は寂しいさまで座し、
…כאלמנה)	*... k'almana)*	…やもめのようになった。）
	PEREQ 4.14-15	
נעו עורים בחוצות	*Na-u ivrim bachutsot*	彼らは盲人のように、ちまたにさまよい、
נגאלו בדם	*N'go-alu badam,*	血で汚れている。
בלא יוכלו	*B'lo yuchlu*	だれもその衣にさわることができない。
יגעו בלבשיהם:	*Yig'u bilvushēhem.*	
סורו טמא קראו למו	*Suru tamē kar'u lamo*	人々は彼らにむかって、「去れよ、けがらわしい」、
סורו סורו אל תגעו…	*Suru, suru al tiga-u…*	「去れよ、去れよ、さわるな」と叫んだので、…
	PEREQ 5.20-21	
למה לנצח תשכחנו תעזבנו	*Lama lanetsach tishkachēnu…*	なぜ、あなたはわれわれをながく忘れ、
לארך ימים:	*Lanetsach taazvēnu…*	われわれを久しく捨ておかれるのですか。
השיבנו יהוה | אליך…	*Hashivēnu Adonai ēlecha…*	主よ、あなたに帰らせてください、…

※　ヘブライ語は、ニクダー（母音記号）なしで表記している。

※　ローマナイズ表記は、スコアに従った。

※　日本語訳は、日本聖書協会の口語訳旧約聖書（1955 年）に従った。

※　第 1 章第 8 節、第 4 章第 15 節、第 5 章第 21 節は、該当の節の全文ではなく抜粋された歌詞となっている。

Text by Kazushi Kubota

L.V. ベートーヴェン　*Ludwig van Beethoven*

交響曲第７番　イ長調作品 92

バーンスタインが最後に指揮した曲

指揮者と作曲家とのはざまでもがき苦悩した天才的音楽家レナード・バーンスタイン。その没後 25 周年追悼プログラムのメインは、指揮者バーンスタインが生涯の最後に指揮した曲、ベートーヴェンの交響曲第７番です。1990 年夏のファイナルコンサートで、立っているのがやっとの苦しい状態に陥りながらも、途中降板せずに、残された命を燃やし尽くすようにして最後まで指揮した曲、それは、リズムのシンフォニーと呼ばれ、ベートーヴェンの強靭な精神力と躍動するリズムに満ちた、数ある楽曲の中でも、とりわけ力強く生命感あふれる曲でした。

リズムのシンフォニー

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770 ～ 1827）の交響曲第７番は、第５番「運命」と第６番「田園」の初演から約３年間の空白を経て、1811 年から 1812 年に作曲され、1813 年４月にルドルフ大公邸で非公開初演の後、同年 12 月にウィーン大学講堂で公開初演されました。２度とも満場の喝采を浴び、２楽章がアンコールされ、また、その後３か月の間に３回も再演されるなど、大変好評を博しました。

ときにベートーヴェン 42 歳。既に、難聴の病による絶望を乗り越え、「傑作の森」と呼ばれる旺盛な創作活動を展開して、名声を確立していました。第５番と第６番初演からの３年間には、ナポレオンのウィーン占領、経済的困窮、失恋、弟との不和など難儀が相次ぎますが、1811 年夏に温泉保養地で再び創作意欲を取り戻したベートーヴェンは、秋にウィーンに戻ってから本格的に第７番の作曲に取りかかり、翌年、新たな作曲技法による新しい交響曲を完成させます。その新たな作曲技法とは、リズムを中心に楽曲を組み立てるという方法でした。

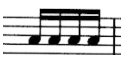
こうしてできた第７番は、後世、リズムのシンフォニー、リズムの神格化、リズムの饗宴などと評されるとおり、徹頭徹尾リズムを中心に展開される曲。４つの楽章はそれぞれに固有のリズムで特徴づけられ、楽曲構成の主要な要素としてその固有のリズムが全曲を貫いています。

リズムは、最も根源的には、鼓動、脈拍であり、歩く走る踊るときに足と大地の間に生まれるもの、また、手拍子など手と何かの間に生まれるものであり、そこには、疾走感、跳躍するときの浮遊感、回転するときの遠心力など、動きの感覚や動きの時間的要素が、必然的に内包されています。さらには、馬の足運び、鳥や動物の鳴き声、雨だれや川の流れなど、自然界にもリズムは満ち満ちており、それゆえリズムは、私たちの中にある命の感覚、生きている！という実感を呼び覚ます特有の力を持っているのです。

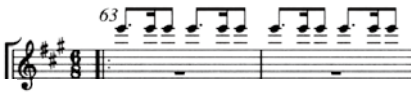
このページの下部に、ベートーヴェンが用いた楽章ごとの特徴的なリズムを記します。試しに、体で感じてみてください（ぜひ開演前に手や足で！でも演奏中は心の中だけで…）。そのとき感じる何かが、そのリズムの命です。各楽章の世界は、まさしくその延長線上に広がっていることが、曲をお聴きいただけば、きっとわかっていただけると思います。

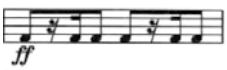
実に全編、これをユニットとして見事に織りなされています。しかも、これは素人の思い込みかもしれないのですが、これらは以下のように相互に関連し合っているように感じられます。つまり、１楽章のパーンパラン又はタッッタタンは、８分の６拍子を２分した３拍ずつの１と３に音があり、２拍めは後半分だけに「タ」ととても短い音があって、前半分は１が伸びる（ン）かお休み（ッ）かの２パターンありますが、いずれにせよ、３拍ずつに分けた１と３に音があります。３楽章のパンパ、パンパも、４分の３拍子の１と３に音があります。従って、１楽章のパーンパランやタッッタタンと、３楽章のパンパ、パンパを、ゆっくり注意深く重ねあわせると、１と３のところで、ぴったり重なるのです。一方、２楽章のラーン、タ、タは、曲の中で最初に、ラーン、タ、タ、ターン、ターンと出てくるのですが、このラーン、タ、タ、ターン部分を、よーく見て、これを少し縮めると、ラン、タ、タ、タン→ラ

第１楽章 序奏部「タタタタ」

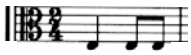


第１楽章 主部「パーンパラン、パーンパラン」と「タッッタタン、タッッタタン」

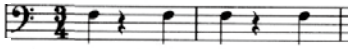




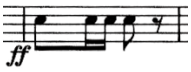
第２楽章「ラーン、タ、タ」



第３楽章「パンパ、パンパ」



第４楽章「ランパカパン！」



ンタタタンとなり、4楽章のランパカパン！とぴったり重なります。さらにさらに、1楽章のパーンパラン又はタッッタタンは、これを演奏しようとするとき、伸ばし又は休みとなっている2拍めの頭（ンまたはッの部分）を意識せずに演奏することができません。従って、奏者の頭の中では常に、ラー、ン、パ、ラン又はタッ、ッ、タ、タンというカウントが行われており、これすなわち4楽章のラン、パ、カ、パン！と重なります。つまり、1楽章と3楽章、2楽章と4楽章が重なり合い、更に1楽章と4楽章も関連しています。そして、1楽章の序奏で最初にリズムが生まれてくるときの弦楽器のタタタタという16分音符の刻みは、リズムの最小単位として、全曲のリズムの礎をなし、1楽章のパーンパランのときも、4楽章のランパカパン！に続く、タリラリラリという回転を思わせる音型のときも、奥の方で全身全霊で16分音符を刻み続ける人たちがいて、それが、各音型を下支えすると同時に、早鐘的、全力疾走的なエネルギーと推進力をもたらしています。

さらに、これらは単に一つのリズムパターンを繰り返すだけでなく、そこから派生し展開した様々な変化形が組み合わされ重なり合い、別の主題も織り交ぜて、ベートーヴェンらしく堅固かつ緻密な設計の下に、すべてがつながり合い響き合って、壮大な一大世界が構築されているのです。そしてその緻密かつ壮大な設計の下で、何かと何かの一致によって符合のように秘密の扉の鍵がカチッと開いたとき、この曲に閉じ込められた膨大なエネルギーが一気に解放され、まばゆく放出されるように感じます。

第1楽章　イ長調

序奏部：ポコ・ソステヌート、4分の4拍子

主部：ヴィヴァーチェ、8分の6拍子

冒頭第一音から、明るく輝くイ長調の主和音が鳴り響いて始まります。その中からオーボエののびやかな旋律が生まれ、低音部の半音下降とともにゆるやかに広がって、まもなく、小さな命の初めての鼓動のように、密やかに弦楽器がタタタタという16分音符を刻み始め、最初のリズムが誕生します。すぐに拡大して力強い上行音階となり、木管楽器の優しい旋律を挟みながら展開。やがて、タタタタのリズムが徐々に変容して、その断片から、1楽章主部の固有リズム、パーンパラン、パーンパランが生まれると同時に、軽快なヴィヴァーチェの扉が開きます。

フルートの軽やかな旋律に始まって、あとは、ひたすらこのリズムに乗っていきます。フェルマータで一旦停止の後からは、一気に花が開くような、めくるめくリズムファンタジーが展開。旋律、固有のリズム、16分音符、和声などなどが離散集合しつつ同時進行、やがてヴィオラと低弦で同じ音型を繰り返す「オスティナート」上にクライマックスを築き、全楽器がフォルティシモで1楽章固有のリズムを奏して力強く閉じます。

第2楽章　アレグレット、イ短調、4分の2拍子

第1楽章最後のイ長調主和音の第3音（ド♯）を半音下げたイ短調の主和音が、冒頭にこの楽章の音風景を示し、これに導かれて、ヴィオラと低弦が、ラーン、タ、タのリズムとともに、和音の色調の変化を主体とした静謐かつ内省的な第1主題を奏でます。主題が第2ヴァイオリンに受け渡されると、静かに風が吹いてくるように対旋律が重なり、和音の色合いが繊細に揺らめきます。第1ヴァイオリン、管楽器と順次新たに重なるに従って、全体は荘厳な輝きを増しながら拡大し、管の主題、第1ヴァイオリンの対旋律、それを支える第2ヴァイオリンの8分音符と中低弦の3連符の分散和音が一刻千金の光模様を呈する得も言われぬ展開を見せた後、潮のように引いて、木管楽器によるイ長調の優しく穏やかな第2主題に移ります。再び第1主題に戻ると、今度は16分音符の対位的音型を伴うフガートなどに展開、第2主題を経て、三たび第1主題に戻ると、夕闇が薄墨色に溶けゆくようなコーダから徐々に終息に向かい、最後は冒頭とまったく同じホルン＋木管によるイ短調の主和音で大きな円環を閉じ、もって、ワーグナーをして「不滅のアレグレット」と称賛せしめた楽章の幕を閉じます。

第3楽章　プレスト、ヘ長調、4分の3拍子

一転、パンパ、パンパの跳ねるようなリズムに乗った軽快なスケルツォが、三度下のヘ長調で始まります。フォルテで跳ね上がるような音型とピアノでなだらかに下降する音型からスフォルツァンドを繰り返してイ長調に転調、この形が展開されていきます。2回挿入されるニ長調のトリオでは、リズムの対極とも言えるロングトーンが保持される中、オーストリアの巡礼の歌から得たという半音の揺れを持つ独特の旋律が各楽器によって歌い継がれます。最後は、再びこのトリオを回想した後、5音のカデンツで簡潔に結ばれ、息つく間もなく次の楽章に突入します。

第4楽章　アレグロ・コン・ブリオ、イ長調、4分の2拍子

ランパカパン！のリズムとともに、第3楽章の最後のヘ長調主和音から半音下がった、イ長調のドミナント「ミ」の衝撃的な和音で、疾風怒濤の最終楽章が始まります。

ランパカパン！2連打の後、第1ヴァイオリンが、アイルランドの古い民謡から取ったと言われる、タリラリラリという目まぐるしく回転するような第1主題を奏し、第2ヴァイオリンとヴィオラが全力疾走的16分音符の刻みでこれを支えます。低弦と管楽器は全体としてランタタ、ランタタという、第4楽章のリズムの拡大形を刻み、このすべてが2拍子の2拍めにスフォルツァンドを持ち、全体として前へ前へと向かう極めて強い推進力を示します。これらが、力強い下行音階を持つ副主題や付点音型の第2主題とともに展開、再現された後、ランパカパン！の連打から突入していく、全曲を閉じる長大雄渾なコーダでは、交互に奏されるタリラリラリが、木管のロングトーンや低弦の半音階的うねりとともに一旦徐々に下降し、その底辺で、低弦＋ヴィオラがミレ♯ミレ♯という半音往復のオスティナートを全力全開で奏し始めると、それに乗って、ヴァイオリンのタリラリラリと木管＋ホルンのロングトーンが、今度は潮が満ちるように上昇していきます。ランパカパン！や副主題を経て更に上り詰めた頂点に、金管を冠する最強音のコラールが鳴り響き、蓄積した力を一挙に解放、一度弱音に落ちてから再び最強音のコラールまで上り詰め、さらに一段のぼって圧倒的な盛り上がりを見せた後、最後に全楽器が残る全力でドミナント＋上行音階＋下行音階を駆け抜け、遂に、この曲の始まりであり終わりである、第1楽章冒頭と同じイ長調主和音に到達する喜びのうちに全曲を閉じます。

（中山 佐知子）

いいんちょうの徘徊日記スペシャル in 横浜

皆さん、こんにちは。水響いいんちょうの植松です。
実はわたくし、水響ホームページの隅のほうで「いいんちょうの雑司が谷徘徊日記」というものを不定期掲載しております。「徘徊」といっても、無意識のうちにウロウロするわけではなく、今の住まいに比較的近い雑司が谷とか目白あたりを散歩して、なんとなくそのあたりの風景やらを文章にしているだけで、まあ、少なくとも、世論を大きく揺り動かすような文章では決してないです（笑）
とはいえ、2013 年 7 月以来、65 回（さっき数えた）もの掲載をしておりますと「毎回楽しみにしています♪」という声も聞こえたりしまして、駄文なりにちょっと嬉しい今日この頃なのですが、水響初の横浜公演ということであれば、やはり横浜を徘徊するしかないだろうと考え、先月（2015 年 8 月）気温 35℃を超える炎天下の中、行ってきました。

まずは、横浜の玄関口、県庁や横浜スタジアムのある関内駅に集合。

そのまま港方面に向かうのが一般的な観光ルートなのでしょうが、あえて逆方向、伊勢佐木町に向け進みます。

うーむ、それにしても、ある目的に特化したようなお店が多いですねえ…
さすが一世を風靡した歓楽街であります。
お、ゆずってここでもライブやっていたんですね。

伊勢佐木町といえば、やはりこの曲、青江三奈の伊勢佐木町ブルースです。ちなみに、記念碑の左下に赤いボタンがあって、押すとまさに伊勢佐木町ブルースが流れる仕掛けになっています。当然押してみましたが、結構はずかしかったです。

横浜のブルースというと忘れちゃいけないのが「別れのブルース」です。「窓を開ければ～港が見える～♪」という曲ですね。ということで、徘徊日記ではふだん使わない大人の乗り物タクシーで、別れのブルースの舞台「チャブ屋」（1860 年代～1930 年代に主に港町にあった外国人や外国船の船乗り相手の食堂兼宿泊所）跡地に立つ本牧の「ロイヤルホテル」に移動。

シブいとしか言いようがありません。「ロイヤルホテル」という名前の普通のホテルですが、雰囲気はほとんどラ…（以下自粛）。上の方に「自由の女神」があるのがわかりますでしょうか。当然海の向こうをみているわけですねえ。別れのブルース、

淡谷のり子先生の名唱を思い出します。昭和 12 年の曲なんですね。

そして、本牧、ブルースとくれば、柳ジョージ。「雨に泣いてる」「酔って候」など数々の名曲を残しましたが、わたくしが最も好きな曲が「FENCE の向こうのアメリカ」という曲です。その歌詞に「エリアワン」という米軍施設が出てくるのですが、その「エリアワン」はまさに本牧にありました。その跡地（今は高級マンション）近くのイトーヨーカドーから周辺を見てみました。先ほどの自由の女神も見えますねえ。

さて、本牧から坂をあがって（無論続けてタクシー移動（苦笑））山手方面に向かいます。すると現れるのが「キリン園公園」です。別にキリンがいるわけではなく、キリンビール発祥の地が公園になっています。記念碑をみると、設立したのはアメリカ人のコープランドさんらしいですね。また、交響曲第３番やりたいですねえ（違）。

かなり歩いたし（タクシーも多かったけど（笑））坂も上ったので、ちょっと休憩。暑いけど木陰が結構涼しいです。外人墓地の向かいにあるカフェでした。やはりビールはキリンですな。極楽極楽。

外人墓地隣、元町公園を下りて元町方面へ。ここは桜の名所だそうですが、山手にある某女子校では、このルートの通学は校則で禁止されていたとのこと。どうやら元町商店街を通ることがよくなかったらしいですが不思議ですね。と思ったら、こんなところに市民プールが。ビキニのお姉さんも多数！良いものは良い！

元町から港方面へ。当初は歩いていく予定でしたが、ちょっと昼間のキリンの度が過ぎてしまい、ひと駅だけみなとみらい線で移動。日本大通り駅で下車し開港資料館に。ペリー来航などの貴重な資料が見られましたが、実際にはあまりに暑くて、わたくしは単に涼んでいただけでした。

いよいよ港へ！大さん橋入り口にある「波止場会館」。バーンスタイン「波止場」のトロンボーントップ櫻井君を思い出しました。これも何かのご縁ですかね。

大さん橋からみなとみらい方面を臨む。本番やったるでえ！となぜか関西弁。

やはり最後は中華街。このレタス包みが特に旨かったです。

いやはや、いろいろな側面を持つディープな面白い街でした。しかし、徘徊するにはアップダウンが激しくていかんですね（苦笑）

水星交響楽団

指揮者
齊藤 栄一

コンサートミストレス
中里 咲子

ファーストヴァイオリン
芥川 俊輔　鈴木 尚志
石川 貴隆　砂川 湧
亀井 亮子　滝澤 蘭
川野 圓　永井 翠
川原 ひかり　◎中里 咲子
國宗 洋子　堀田 淳子
櫻田 雅信　村越 麻里
篠原 麻友　米嶋 龍昌

セカンドヴァイオリン
池田 葵　高原 苑
石川 直美　土屋 和隆
◎伊東 陽子　徳地 伸保
大西 彩加　成清 薫
岡村 昂洸　日比 俊太
織井 奈津乃　布施木 元
黒川 夏実　前田 啓
小林 美佳

ビオラ
網中 愉香　木村 納
有井 晶　古宇田 凱
太田 文二　藤田 啓也
小澤 未来　古屋 圭織
落合 純一　牧原 正典
◎川俣 英男

チェロ
木田 萌子　◎中山 憲一
北岡 正英　中山 佐知子
首藤 ひかり　日吉 実緒
鈴木 皇太郎　森 千晃
高橋 幾多郎　能岡 雅人
橘 温子

コントラバス
阿部 洋介　中川 慧音
大西 功　増渕 悠太
◎刈田 淳司　山六 真由
田中 文彬

フルート
大平 明香　西村 かよ子
大山 司　◎本田 洋二

オーボエ
石井 英久　野口 秀樹
◎齋藤 暁彦

クラリネット
中山 哲兵　◎藤原 誠明
西村 伸吾　横地 篤志
馬場園 真吾

アルトサックス
藤原 誠明

ファゴット
◎冨井 一夫　依田 啓介
村田 志穂

ホルン
伊集院 正宗　深村 美佳
岡本 真哉　山形 尚世
◎島 啓　山崎 智哉

トランペット
淺田 健二　金子 恭江
家田 恭介　河田 真紀
◎岩瀬 世彦

トロンボーン
櫻井 統　◎佐藤 幸宏
佐々木 英王

テューバ
植松 隆治

パーカッション
岸 敦子　◎椿 康太郎
鈴木 海里　原島 のぞみ
高橋 淳　山本 勲

ハープ
東森 真紀子

ピアノ
高尾 麻衣子

◎＝パートリーダー

今回お世話になったトレーナーの皆様

木村 康人　草川 正憲　髙山 健児　内藤 佳有　西江 辰郎　林 憲秀　古野 淳　三橋 敦　山田 裕治

水星交響楽団運営委員会

運営委員長
植松 隆治

コンサートミストレス
中里 咲子

弦インスペクター
川俣 英男　刈田 淳司

木管インスペクター
横地 篤志

金管インスペクター
佐藤 幸宏

打楽器インスペクター
山本 勲

総務
伊東 陽子

ステージ・マネージャー
櫻井 統　真崎 護

会計
金子 恭江　黒川 夏実

楽譜
伊集院 正宗
野口 秀樹　宮川 雅裕

運搬
刈田 淳司　山本 勲

会場
横地 篤志

広報・受付
岡本 真哉　小澤 未来
鈴木 海里　鈴木 牧
土屋 和隆　東海林 拓人
野村 国康

レセプション
川原 ひかり　首藤 ひかり

合宿
鈴木 海里　椿 康太郎
山崎 智哉

インシュペクター
椿 康太郎　永井 翠

演奏会のご案内

水星交響楽団 第 53 回定期演奏会

2016 年 4 月 24 日（日）
ミューザ川崎シンフォニーホール
13：00 開場　13：30 開演（予定）
全席自由　1,500 円
ブルックナー　交響曲第 7 番（ノヴァーク版）
ブリテン　シンフォニア・ダ・レクイエム
指揮　齊藤 栄一
水星交響楽団ホームページ　http://suikyo.jp
お問い合わせ　email:info@suikyo.jp

一橋大学管弦楽団 第 63 回定期演奏会

2015 年 12 月 18 日（金）
東京芸術劇場コンサートホール
19:00 開演（予定）
全席指定　S 席 1,000 円　A 席　500 円　B 席（当日券のみ）無料
サン＝サーンス　交響曲第 3 番「オルガン付き」
プーランク　管弦楽組曲「牝鹿」
デュカス　交響的スケルツォ「魔法使いの弟子」
指揮　鈴木 優人
一橋大学管弦楽団ホームページ
http://jfn.josuikai.net/circles/orchestra/
チケット事前受付
email:huo.ticket@gmail.com

チラシデザイン・プログラム表紙イラスト：黒川貞徳